# 辞書が出来るまで

英語英文学科4年　下村　ゆい

**主題**

私たちが普段話している中、もしくは何か読んでいる時にわからない言葉に出会ったらどうするだろう。母語であっても、意味の推測できない語や、今までなおざりにしてきたために意味があやふやなものが多くあると思う。そんな時は、誰かに聞くか、何かを使って調べるのが一般的だ。その中でも、明解な答えにたどり着くための道具として頼りにされるのが「辞書」である。人に聞いたり、インターネットから意味を割り出すというのは、既に他者の個人的な趣味趣向の混ざった意味となってしまっている可能性があるので純粋な意味を知るのは難しくなる。なので、客観的な立場から定義や特徴を述べる「辞書」から意味を知ることをお勧めする。ちなみに、ここでいう辞書とは、国語辞典であることを前提に読んでいただきたい。

さて、今でこそ困ったときは五十音まとめて辞書を眺められるが、辞書が無いときはどうしていたのだろう。もし私が作れと言われたら、一通りの基本語をまとめ、日々、ああそういえばと語を足していき、やっと一冊出来上がることが想像できる。きっとそこには、「私らしさ」が随所に出てしまうことだろう。例えば、他人に言わせれば、抜けている語が多いだの、こんな語は普段使わないか存在しないといったところである。もちろん、そんな様では今日の辞書のような、あらゆる語を完全網羅した一冊は出来上がらないのである。では、辞書は、いつ誰が何をきっかけに作られたのだろうか。この記事を読んでいる方々も、人生で一度は、ふと考えたことはないだろうか？

**辞書の歴史**

まずは、辞書が製本されるまでを紹介する前に、辞書がどういった経歴で作られたのかを紹介する。

実は、今日の様な国語辞書というのは案外歴史が浅く、明治時代になってやっと登場したのである。それ以前にも辞書はあったのだが、この現代のような用途の辞書にたどり着くまでに、四つの工程を経てきた。

一工程目は、平安時代初期にさかのぼる。当時は、中国の古典を読むことが重要な勉強とされていた。そのため、まず『新撰（しんせん）字（じ）鏡（きょう）』という、漢字の読み方と解釈の載った漢和辞典が誕生した。

次の工程は、鎌倉時代である。ここでやっと国語辞典が登場する。『色葉字類抄（いろはじるいしょう）』といって、日本語がイロハ順に

並んでいる辞書である。しかしこれには、意味や解釈は載っていないのである。なぜかというと、ある言葉に漢字を宛てるとどのような漢字で書くのかを知るための辞書だったからなのだ。

そして、この三工程目でやっと解釈付の辞書が登場する。『和訓（わくんの）栞（しおり）』といって、江戸時代に作られた辞書である。しかし、注目すべきところはこれが古語辞典であることだ。当時の人々は、現代語の解釈など全然必要ないと思っていたのである。そのため、初の解釈付の辞書は、平安時代の古典を読むのに需要のあった古典辞書なのであった。

そして、最後の工程、やっと現代語に対しての解釈の付いた辞書が明治9年に誕生する。国語学者の大槻文彦博士によって作られた『言（げん）海（かい）』という辞書である。ほぼ独自で編んだ辞書だそうだが、これが後の国語辞書の全ての模範となったと言われている。同じく辞書で有名な、金田一晴彦氏によればこの『言海』という辞書は実に綺麗な感じを受けるそうだ。それは当時はまだ、漢語がそれほど多くは無かったことや、外来語（カタカナ）が非常に少なかったので、純粋な日本語が並んでいる姿が美しく感じられたようだ。

全ての基盤となる国語辞書のことなので、『言海』についてはもう少し深く中身の説明を加える。例えば「あ」を引くと、「あかつき（暁）」、「あけぼの（曙）」、「あさつゆ（朝露）」といった単語が並んでいる。このような感じで、具体的な事物や特に自然を表すものや植物の名前が多く載っていた。中には奇抜な言葉もあり、「傘驚（かさおどろ）き」などといった言葉もあがっている。意味は「馬の前に突然傘を拡げると馬が驚くこと」とある。そんな事をされたら私だって驚くと思いつつも、今日の辞書の基礎なので感謝しなければいけない。また、語の解釈もなかなか面白いようで、「さつまいも」を引くと「賤（せん）民（みん）（貧しい庶民）これを常食とす」と、いかにも時代を表していることが伺える。さらに、「猫」には「盗癖あり」という一句があり、これは猫好きの芥川龍之介の影響を受けているようで、なんとも洒落た辞書だと思ってしまった。

最後の『言海』に関しては、少し詳しく言及させていただいたが、これらの四工程を経て現代の辞書に至っている。

## 辞書が出来るまで

さて、たくさんの語彙の詰まった国語辞書がどうやって製本され、みなさんの手元に来たのかという説明の項である。ここまで読んで下さった方、どうもありがとう。

辞書は、「企画立案」、「編集委員会」、「組見本」、「執筆・入稿・校正・校了」、「図版・写真・表組」、「付き物」、「印刷・製本」、「刊行・流通」といった八つの順番で作られていくので、順を追って説明していく。ここからは、小学館の国語辞書編集部に協力いただき、今日の辞書のできるまでを明らかにする。

### ①企画立案

どのような国語辞典を編集するのかという基本的な構想に、さまざまな角度から検討した要素を加味して企画を立案する。

・社会情勢を考慮し、読者の求める辞書を分析する。さらに、新しい制度・法律、発見など、さまざまな社会の変化を辞典の記述に盛り込む。

・対象者や、辞書の規模なども大まかな編集方針を立てる。

・編集する人員や作業の進行表、費用の算出も

この過程で決める

・表紙や本文の紙を検討し、辞書の原価を計算し定価を決める

これらを企画書にまとめ会議にかける。

**②編集委員会**

国語辞典に対する編集責任を持ち、辞典の編集方針などを決める意志決定機関。

・その国語辞書編集の意義や、特色など、辞典の根幹となる考え方を、編集委員会と編集部とで討議して決定する。

・基本語、日常語、古語や外来語など、専門語彙や固有名詞、ことわざ・慣用句など、さまざまな分野から、どの言葉を収録するかを決定する。編集部が持っている、書籍・新聞・雑誌・教科書などから採取した単語や、今まで蓄積した語彙データベースなどを利用して語彙を収集し、リストを作成する。

・項目の説明に含まれる各要素について、説明の形式や方法を決める。（例：仮名遣い、語源、アクセントや文法の解説、関連語（類語・反対語・派生語など）、特色（この辞典独自の情報や図表・写真など））

編集委員会で決定した事項をもとに、さまざまな分野から特徴的な言葉を選び出し、どのように解説するかを具体的に説明した執筆要領を作成する。

**③組見本**

見本原稿を作成して印刷所に渡し、検討した何種類かの構図で、実際に組んで校正刷りを印刷してみる。

・一般語・百科語・多義語、和語・漢語・外来語、固有名詞、動詞・形容詞・助詞・助動詞といった異なる組みのパターンや、表組や写真・図版など、さまざまな要素を確認できる見本原稿を作成する。

見本原稿を入稿し、デザインどおりに組んで印刷する。そうして作られた組見本を見て検討し、読みやすい辞典になるよう調整する。

**④執筆・入稿・校正・校了**

各分野の専門家に依頼して執筆要領に従った原稿を作成する。原稿を印刷所に送り、内容を調整する。また、付録や凡例を同じ手順で作成、調整して、印刷できる状態にする。

・編集委員会で作成した執筆要領に基づいて執筆を開始する。編集部では、項目管理台帳を作成し、執筆者の専門領域に合った項目を選んで執筆者に送る。また、執筆から校了までの進行状況を管理する進行管理台帳を作成する。

・執筆者から届いた原稿は、編集委員ならびに各分野の専門家に送られ、専門校閲を受ける。主に記述内容に関する不備を修正し、他の項目との整合性を吟味する。校閲作業は、原稿の段階だけではなく、問題があれば随時行われる。

・校閲のすんだ原稿を組版に適した形式に修正していく。記述の順序、用例の位置、記号の使い方、語義番号、ルビなど、さまざまな部分を組版ルールに従った形式にする。また、解説中の用語を統一し、書体の種類や大きさを原稿に指定する。

・整理の終了した原稿を印刷所に送る。

・原稿と照合して修正を加えた後、執筆者に校正を依頼する。問題点があると、専門家の校閲を受ける。この校正は入念に数回繰り返される。

・校了が近づくと序文・凡例（前付け）や付録（後付け）の原稿の準備を始める。凡例は、編集委員会で決めた編集方針や執筆要領に沿って作成される。辞典の凡例には、辞典の使い方や記号類の説明が記載されている。

すべての校正作業が終了すると、編集部から最終的に印刷所に渡される赤字（修正・補筆）箇所は、印刷所が責任をもって修正するという条件で校了になる。

**⑤図版・写真・表組**

解説を補う図版や写真を集め、特色となる表組などを作成する。

・古い時代に使われた道具など、言葉で説明するだけではわかりにくく、図や写真を表示することで理解しやすくなる語を語彙リストから選び出し、写真を準備する。

・画家や写真家に依頼し、画像を作成する。

・類語の対比表などの表もこの時に作成される。予定されたページ数と大幅なずれがないか確認しつつ組み込む。

**⑥付き物**

ケースや帯、扉や奥付、といった本文以外の付属物の装丁をどうするか検討し、作成する。

・ケースや帯の複数の見本をデザイナーに作ってもらい編集部で検討する。そして、それも校正・校了にかけ、文字や色を調整。

・奥付には、編者・発行者・印刷所の名称、その辞典の歴史がわかる重版・改訂の日付が表示される。

・栞（しおり）やスリップ（書店で売り上げや注文に使われる）、愛読者カード（その辞書についてのアンケート葉書）についても検討される。

**⑦印刷・製本**

完成した本文・凡例・付録・奥付・見返し・扉・ケース・カバー・帯・栞（しおり）などのデータを印刷して製本し、辞典が完成する!!

※小学館では、印刷の技術や、辞書を長持ちさせるための材料による加工についてもこだわっているのだが、趣旨とずれるのでここでは述べない。

**⑧刊行・流通**

世に出回る!!

この八つの過程を経て、全国の書店に流通し、私たちの手元に辞書がやってくるのである。

**まとめ**

辞書の歴史から知り、現在では定期的に内容を改定しつつも、広く世の中に発行されている現実を知ることができて良かった。私としては、収録語が偏りすぎてしまった様な辞書の失敗作は存在するのか、などといった少々意地悪な興味の方が強かったのだが、これでよかったのである。最初の歴史解説で触れたように、初期の辞書は編者がほぼ独自で、収録語に偏りが感じられるという事実があった。なので、ここではその後どの様に、（改定を重ねて）発展していったかがより感じられるように、製品としての

辞書という視点を取り入れたと思ってもらいたい。

忙しい合間に、対応して下さった小学館の編集者の方に感謝いたします。

**最後に**

みなさんは、どんな辞書を使っているだろうか。国語辞書に限らず、考えてほしい。私の場合、英文科なので英語系の辞書には大変お世話になっている。

義務教育を終えた後の学生生活で、私が周りでよく目にしているのは電子辞書である。電子辞書は実に便利である。必要とあれば発音してくれるし、狙った語を瞬時に提供してくれる。これがあれば、単語の意味調べ宿題をやり忘れても提出間際まで粘れるし、先生に突然意味のわからない語を使って質問されてもチラッと辞書に目配せをすれば、会話が成り立つ。すごいではないか。では、調べたものが身になるかという視点からも見てみよう。

先に述べたような電子辞書と分厚い紙辞書では、どちらが調べたものが身に付くのだろうか。偏った調査結果だが、私の周りでは紙辞書の愛用者の方がずば抜けて語彙力が高いのである。どうか勘違いをしないでほしい。私の周りの学友は優秀な方々ばかりなのだが、その中でも特に「紙辞書族は」という意味であることに注意してもらいたい。

一つの見解として、手間がかかる分、関わる時間が多いので記憶に残りやすいという点が考えられる。キーを押して意味を提供してくれる電子辞書より、毎回アルファベットの序列を考えながらたどり着く紙辞書の方が一手間かかっている様に思えるのである。あと、目当ての語を調べ終えた後も、関連語から目に入った語まで、何気なく本のように読み続けてしまうと「紙辞書族」は口をそろえて言う。そのため、日常生活では到底使わないような単語まで知っている場合があるのだ。なるほど、語彙の多さも納得がいくというような気がしないだろうか。

私は辞書が大好きだ。意味のわからない語でも、必ず辞書は明確にしてくれる。言い換えれば、道のないところに道を作ってくれる。確かに、理解に行き詰った時でも辞書を引けば、道が開けたような気持ちになり、先へとずんずん進むことができる。更に言えば辞書は、お腹を空かせた子にいつでも食料を与えてくれるような存在である。意味を知りたいと思った時に辞書を見れば、必ず知識欲を満たしてくれる。そのため、私の中では、頼れて包容力のある物体として位置付けされており、何もなくても手に取って読んでしまうくらい辞書に寄り添ってしまう。

さて、最後はくだらない主観で辞書への愛を綴ってみた。みなさんもここまで思わなくても、「辞書っていいな」とあらためて考えていただけたらと思う。また私の話になるのだが大学生活も最後である今、生徒という立場になる事も、もしかしたらないのかと思いながら小学校から今までを振り返っている。そしてその中で、辞書は常に切り離せない存在だったなと思った。辞書、今までお世話になりました。これからも辞書といい付き合いをしていきたい。みなさんも、いい辞書にめぐり合えますように。

参考文献

竹林　滋、千野　栄一、東　信行（1992）『世界の辞書』研究社

小学館お勧め　Web日本語
http://www.web-nihongo.com/